

ひょうご 水百景

No.128-2 木曾川（長野県南木曾町）

～“蛇抜け”つながりで木曾路へ～



写真-1 木曾川に架かる桃介橋（令和2年11月撮影）

■ 花崗岩地帯を流れ下る木曾川

上の写真は、木曾川に架かる「桃介橋」を、右岸側から撮ったものです。ここは長野県南木曾町（なぎそまち）、木曾谷の南端に位置し、町の中央を木曾川が流れています。橋の向こうのやや右手に中央本線の南木曾駅があります。

この橋は国指定の重要文化財で、橋長約 247m、幅員約 2.7m、歩行者用の木造吊り橋としては日本最大級の長さです。アーチ型にくり抜かれたコンクリート製の主塔の高さは約 13m、大正 11（1922）年に「電力王」と言われた大同電力（関西電力の前身）社長の福澤桃介※¹（ふくざわもすけ）によって、読書（よみかき）発電所建設の資材運搬路として架けられたもので、橋名は福澤桃介に因んでつけられています。

また、河原を埋め尽くす白っぽい巨石群は花崗岩です。木曾川の右岸側と左岸の一部は、苗木・上松（あげまつ）花崗岩が占め、左岸の高標高部には木曾駒花崗岩が分布しています。この上流約 8.7km にある「阿寺（あてら）溪谷」や約 25km 上流の「寢覚の床（ねざめのとこ）」も花崗岩です。このように、木曾川上流域の大部分は、花崗岩または花崗閃緑岩で占められています。

ここ南木曾町を訪れたのは、「蛇抜け」つながりからです。香美町を流れる佐津川上流の「蛇抜け」を執筆するときに「蛇抜け」でググっていると、南木曾町の「蛇抜け」がヒットし、この地にも「蛇抜け」という言葉があり、過去に大規模な土石流災害を経験していることから興味を持った次第です。加えて写真-1 の桃介橋を見たかったというのもあります。

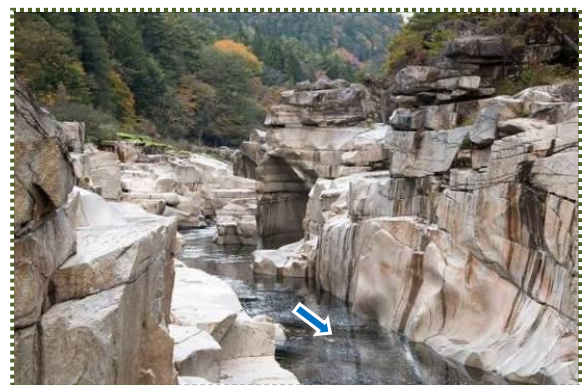


写真-2 木曾川・寢覚の床（長野県上松町）

※1 福澤桃介：慶応 4（1868）年生まれ。明治・大正期の実業家。福澤諭吉の次女ふさの婿。明治 20（1887）年慶應義塾を卒業、諭吉の援助でアメリカへ渡り、ペンシルバニア鉄道で見習いをする。明治 22（1889）年帰国して北海道炭礦鉄道、王子製紙などに勤務したが、その間 2 度肺結核を患って退社。入院中に株に興味をもったのをきっかけに天下の相場師と呼ばれるまでになり、投機で財をなす。その後、松永安左工門と鉄道会社を創設。また電源開発にも手腕を発揮し、八百津発電所、矢作水力、大阪送電、大同電力などを設立。東海道電気鉄道、名古屋電燈など、設立や経営に関係した会社は 100 社に及ぶ。反面、奔放な遊び人としても知られ、役者・川上音二郎の未亡人であった川上貞奴との艶聞を隠そうとはしなかった。昭和 13（1938）年死去。71 歳。

■ 土砂災害の恐ろしさを伝える「蛇抜け」

昔の人は、大規模な土石流や大洪水といった天変地異は大蛇の仕業と考えていたようで、そういった大災害のあった所にはそれらしき地名が付けられています。長野県木曽地方では、土石流災害のことを「蛇（じゃ）抜け」と呼んで土砂災害の恐ろしさを今に伝えています。

「蛇抜け」は、『日本国語大辞典』によると「大雨などで土砂が崩れること。山崩れ」を意味する方言とされています。長野県や岐阜県の一部地域、山梨県あたりで使われているようですが、昭和 38（1963）年に國學院大學民族研究会が兵庫县城崎郡竹野町（現・豊岡市）で行った民族調査の報告書に以下のような記述があり、兵庫県の但馬地方で「蛇抜け」という言葉の使用が確認されています。

竹野町川南谷（かなだに）集落での聴き取りの中で、「この村の山奥の大沼、小沼には蛇が住んでいるという。香住や三川あたりでは、蛇抜けとって、3 日間も 4 日間も地鳴りがするが、この蛇が大沼、小沼から抜け出て里に下りるのだという。昔、三川集落は、この蛇抜けのために、沼の水で流されてしまったことがあった。」

■ 大規模土石流災害を伝える「蛇ぬけの碑」

木曽地方、特に南木曽町では、気象・地形・地質などの条件が揃っていて、「蛇抜け」の常襲地帯となっています。年間平均降水量は 2,500mm、多い年で 3,500mm で、加えて花崗岩質の土壌です。急傾斜の斜面が多く、大雨が降り、あるいは雨が降り続けると、地盤が緩み「蛇抜け」が発生しやすくなります。

昭和 28（1953）年 7 月 20 日、活発な梅雨前線が本州を横切る形で停滞していて、桃介橋周辺では 1 時間に 50mm を超すような非常に激しい雨が降り、辺りが白っぽく見えたそうです。午前 8 時頃、木曽川の右支流である伊勢小屋沢上流の国有林地帯が崩壊して発生した土石流が始業前の読書中学校（現・南木曽中学校）を襲いました。大量の土砂は中学校や教員住宅にも流入しましたが、登校途中の生徒は無事でした。沢の流れが止まったのを見て、大急ぎで家に戻り家族を引きずるように飛び出して難を逃れた方もいましたが、残念ながら避難途中だった中学校校長の妻と子供 2 人、計 3 人が犠牲になってしまいました。

桃介橋の右岸近くには、濁流とともに流れ出た花崗岩の巨石をそのまま用いた「蛇ぬけの碑」（写真-3）があります。この碑は、土石流災害の教訓を後世に伝える意味も込めて、被災者の七回忌に建立されたものです。碑文には、南木曽町に伝わる「蛇抜け」の前兆とされる俚諺（りげん）を刻んで後世への戒めとしています。また、巨石の上には、腰掛けて泣いている人の像があり、「悲しめる乙女の像」と呼ばれています。これは、東京芸術大学助教授で彫刻家の故・笹村草人（そうかじん）が制作したものです。

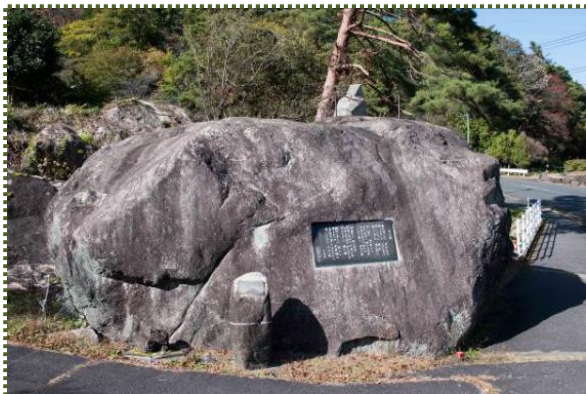


写真-3 流れ出た花崗岩の巨石を用いた「蛇抜けの碑」

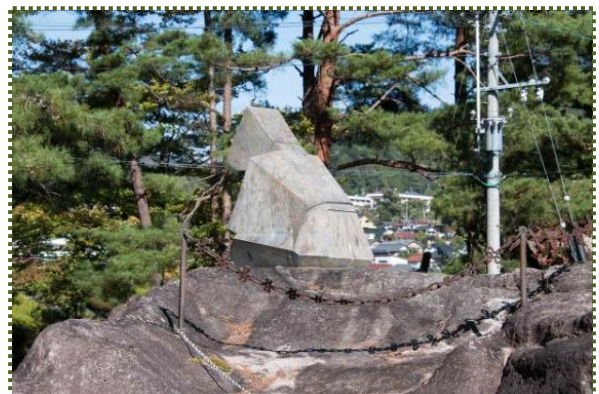


写真-4 悲しめる乙女の像

■ 「蛇ぬけの碑」碑文について

碑文は、「蛇抜け」に関する五つの俚諺が刻まれています。半逆光だったので少し見づらいです。

・「白い雨が降るとぬける」とは、豪雨で周辺が白く見える状態を指し、気象庁が発表している「雨の強さと降り方」でも、1時間雨量が50mmを超すと「水しぶきであたり一面が白っぽくなり、視界が悪くなる」と表現しています。このような雨になると、土石流が発生する危険性が高くなります。

・「尾先 谷口 宮の前」とは、それらの場所には家を建てないように、という意味で、特に尾根の先や谷の出口は土石流の危険度が高い所です。

・「長雨後に谷の水が急に止まる」とは、上流で崩壊した土砂が天然ダムを形成している可能性が考えられ、やがて天然ダムが決壊すると土石流となって下流に一気に押し寄せてきます。

・「蛇ぬけの前にはきな臭い匂いがする」とは、山が崩れて土中の臭い匂いが出てきた可能性を示唆しています。

蛇ぬけの碑 俚諺
白い雨が降るとぬける
尾（根の）先 谷（の）出（口） 宮の前
雨に風が加わると危い
長雨後 谷の水が急に止まったらぬける
蛇ぬけの水は黒い
蛇ぬけの前にはきな臭い匂いがする

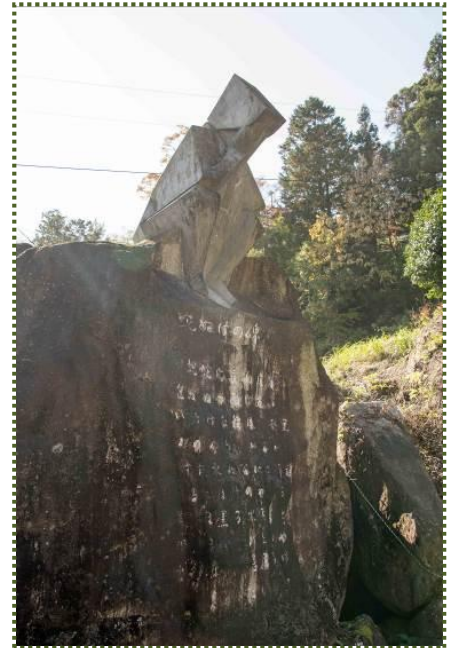


写真-5 「悲しめる乙女の像」と
その下に刻まれた「蛇抜けの碑」碑文

■ 平成 26 年に梨子沢（なしざわ）で起きた土石流災害

木曾川の左支流である梨子沢流域は、中生代白亜紀末の木曾駒花崗岩および上松（あげまつ）花崗岩が分布し、地表面は真砂土で覆われています。

平成 26（2014）年7月9日、梨子沢流域（図-1 参照）で土石流が発生しました。最も近い南木曾観測所では、9日15時50分から18時20分までの150分間に93mmの豪雨が観測され、この雨により17時41分に土石流の第1波が発生し、その状況が現地に設置されていた CCTV の記録によって確認されています。全壊家屋10棟、一部損壊3棟、床上浸水3棟、そして悲しいことに中学生1人が犠牲になっています。

梨子沢は、その後写真-6のように改修され、土石流の氾濫地点には「平成じゃぬけの碑」が建立されています。

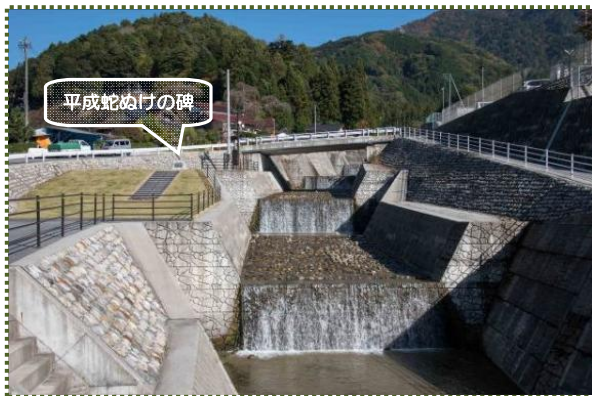


写真-6 災害復旧後の梨子沢（旧中山道・梨子沢橋から上流を撮影）



写真-7 梨子沢右岸に建立された「平成蛇ぬけの碑」

当流域には、国が施工中のものを含め、国・県が設置した3基の砂防堰堤があって、それらが約85,000m³の土砂を捕捉しましたが、砂防堰堤を乗り越えた土石流が左にカーブしている流路工を曲がり切れず直進して大きな被害を与える結果となってしまいました。

梨子沢右岸に建立された「平成蛇ぬけの碑」に記されている碑文は以下のとおりです。

平成じゃぬけの碑

夏らしい暑い日だった
昼過ぎから雲が出てきた
三時過ぎから雨が降ってきた
猛烈な雨になった
一時間程白い雨が降った

平成二十六年七月九日午後五時四〇分
麓では雨が降りやむ頃「蛇抜け」が出た
南木曾山の頂から蛇抜けが出てきた
堰堤を乗り越え 梨子沢を一気に下ってきた
幾つもの堰堤がこらえた
その上を轟音とともに乗り越えてきた
道路を 橋を 線路を 住宅を呑み込んだ

悲しみが町を襲った
たくさんの人々に助けてもらった
国県多くの組織に助けもらった
町は蘇った 山も川も蘇った
ここに住み続ける私達も 今こそ蘇る

この教訓を防災の礎とするため

本災害で発生した石で碑を残す

平成二十九年夏

南木曾町

■ 蛇抜沢

中央本線・南木曾駅の東にある沢の名称は「蛇抜沢」で、そこに架かる橋の名は「蛇抜橋」です。そのものズバリの名前が付けられた「蛇抜沢」は、桃介橋付近で木曾川に注ぐ延長約 1.5km、比高約 500m の河川です。山地部の平均勾配は 27 度と急峻で、南木曾駅東側の山裾の緩斜面は、土石流により形成された扇状地です。その末端部に、国道 19 号や JR 中央本線、旧中山道が通り、その周辺に集落が形成されています。

山地の地質は、六甲山系と同じ中生代白亜紀の花崗岩・花崗閃緑岩で構成されていて、岩石は堅硬ですが節理が発達しマサ土化が進行しているため、崩壊が発生しやすい状態にあります。

山裾には、北東-南西方向に延びる馬籠峠断層（活断層）およびその副断層があり、これら断層運動による破碎も、岩石の風化を促進していると思われます。

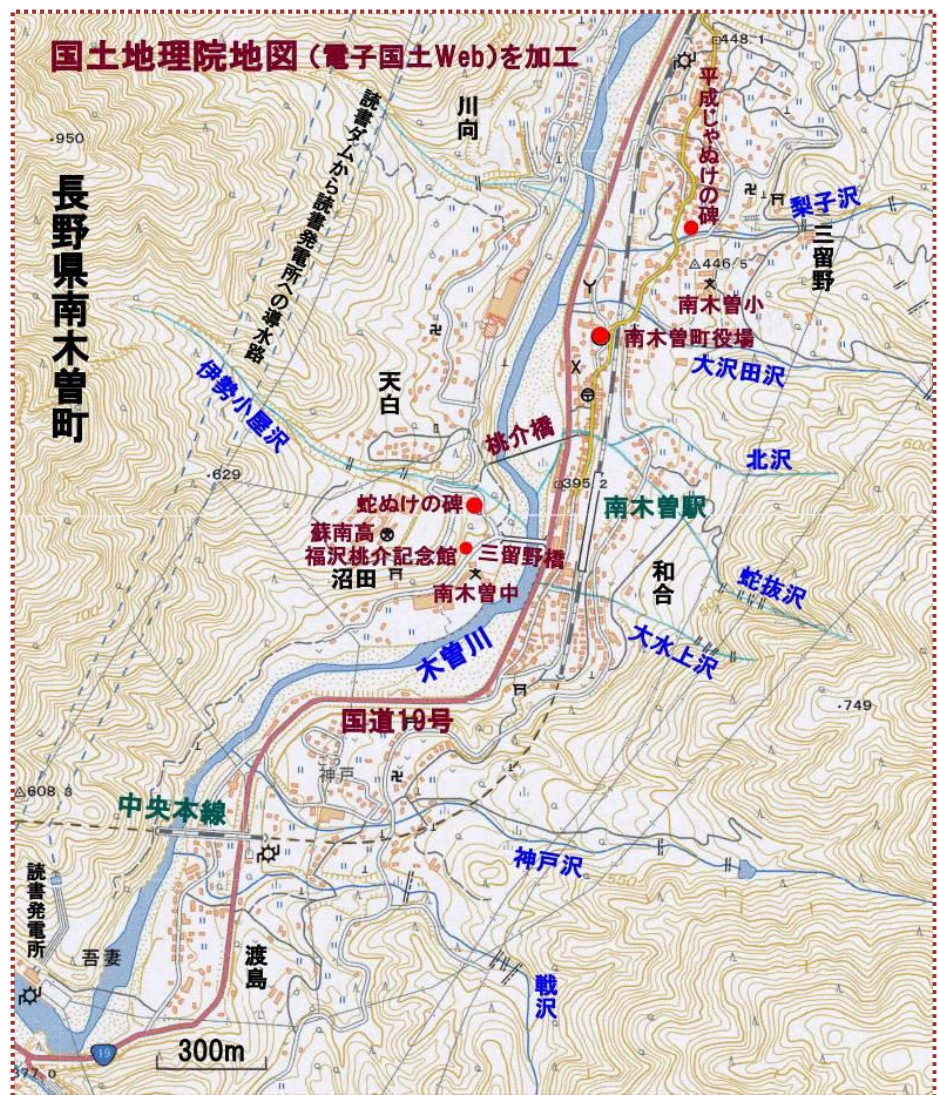


図-1 南木曾町中心部の地図

昭和 9 (1934) 年 6 月 21 日、読書村を中心とした集中豪雨で、梨子沢、蛇抜沢などで土石流が発生、蛇抜沢が押し出した土砂が三留野駅（みどのえき：現・南木曾駅）に流入する被害が出ています。

蛇抜沢および周囲の河川流域は、山地から出て木曾川に注ぐまでの斜面が全て土砂災害警戒区域（土石流）に指定されています。

また、図-1 に記載のとおり蛇抜沢をはじめとして多くの支流に数多くの堰堤工（谷止工）が施工されており、扇状地には流路工が整備されています。

風化花崗岩が分布し、活断層が存在、そのため土石流災害が起きやすいことから、多くの砂防堰堤が整備されているということで、六甲山系とよく似た状況です。



写真-8 桃介橋右岸側から蛇抜沢方向を撮影

■ モノローグ

ここ長野県南木曾町には、令和2（2020）年11月に訪れていますが、幸いにも晴天に恵まれ、青空が映える写真が撮れました。写真が暗いと気分的にも暗くなるので、そういう意味ではよかったと思っています。

花崗岩地帯における土石流災害といえば、真っ先に浮かぶのが昭和13（1938）年7月に六甲山麓で起きた「阪神大水害」です。この時も、六甲山から大量の巨石が流れ出てきましたが、ここ南木曾町を流れる木曾川の河原にも乗用車くらいのおおきな巨石がゴロゴロしています。どこから流れ出てきたのかわかりませんが、改めて水の力の凄さに驚いています。



写真-9 木曾川の河原を埋める巨石群
桃介橋から上流を撮影

【参考資料】

- 1 『福澤桃介』 プリタニカ国際百科事典
- 2 『防災歳時記（37）～悲しめる乙女の像』 元気象庁天気相談所長・宮澤清治
- 3 『怪異・妖怪文化の伝統と創造～蛇抜けと法螺抜け』 斎藤 純 平成27年1月
- 4 『長野県南木曾町 梨子沢土石流』 国土交通省中部地方整備局 平成26年8月
- 5 『過去の災害に学ぶページ～木曾郡南木曾町読書地区蛇抜沢』 長野県建設部砂防課 HP
- 6 『論説 土石流に関する災害伝承と前兆現象』（一般財団法人）砂防・地すべり技術センター研究顧問・池谷 浩
- 7 『南木曾町、笹村草家人』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

阿寺（あてら）渓谷

長野県木曾郡大桑村を流れる木曾川の右支川・阿寺川にある全長約15kmの渓谷で、水の透明度が高く、エメラルドグリーンの水の色は「阿寺ブルー」とも呼ばれる。阿寺川に沿って美しい色の淵や滝、奇岩などの絶景スポットが連なっている。川沿いの道は「サファイアロード」と呼ばれているがとても狭い。車の離合が難しい箇所があり、そのため時に渋滞が発生することもある。筆者も渓谷の出口手前で渋滞に巻き込まれました。



写真-10 阿寺渓谷

※発行：令和3（2021）年6月 『ひょうご水百景』No.128 付録
改訂：令和8（2026）年4月 『ひょうご水百景』No.128-2